花をうめる

新美南吉

その遊びにどんな名がついているのか知らない。まだそんな遊びをいまの子どもたちがはたしてするのか、町を歩くとき私は注意してみるがこれまでみたためしがない。あのころつまり私たちがその遊びをしていた当時(とうじ)でさえ、他(た)の子どもたちはそういう遊びを知っていたかどうかもあやしい。いちおう私と同年輩(どうねんぱい)の人にたずねてみたいと思う。

　なんだか私たちのあいだにだけあり、後にも先にもないもののような気がする。そう思うことは楽しい。してみると私たちのなかまのたれかが創案(そうあん)したのだが、いったいたれだろう、あんなあわれ深い遊戯(ゆうぎ)をつくり

出したのは。
その遊びというのは、ふたりいればできる。ひとりがかくれんぼのおにのように眼をつむって待っている。そのあいだに他のひとりが道ばたや畑にさいているさまざまな花をむしってくる。そして地べたに茶飲茶碗ほどの——いやもっと小さい、さかずきほどの穴をほりその中にとってきた花をいい按配に入れる。それから穴に硝子の破片でふたをし、上に砂をかむせ地面の他の部分とすこしもかわらないようにみせかける。
「ようしか」とおにが催促する、「もうようし」と合図する。するとおにが眼をあけてきてそのあたりをきょ

ろきょろとさがしまわり、ここぞと思うところを指先でなでて、花のかくされた穴(あな)をみつけるのである。それだけのことである。

だがその遊びに私たちが持った興味(きょうみ)は他の遊びとはちがう。おにかくしおおせて、おにを負かしてしまうということや、おにの方では、早くみつけて早くおにをやめるということなどにはたいして興味(きょうみ)はなかった。もっぱら興味(きょうみ)の中心はかくされた土中の一握(ひとにぎり)の花の美しさにつながっていた。

砂(すな)の上にそっとはわせてゆく指先にこつんとかたいものがあるとそこに硝子(がらす)がある。硝子(がらす)の上の砂(すな)をの

ける。だがほんのすこし。ちょうど人さし指の頭のあたる部分だけ。穴(あな)からのぞく。そこには私たちのこのみなれた世界とは全然別の、どこかはるかなくにの、おとぎばなしか夢(ゆめ)のような情趣(じょうしゅ)を持った小さな別天地(べってんち)があった。小さな小さな別天地(べってんち)。ところがみているとただ小さいだけではなかった。無辺際(むへんさい)に大きな世界がそこに凝縮(ぎょうしゅく)されている小ささであった。そのゆえにその指さきの世界は私たちをひきつけてやまなかったのである。

いつもその遊びをしたわけではない。それをするのは夕暮(ゆうぐれ)が多かった。木にのぼったり、草の上をとびま

わったり、はげしい肉体的な遊戯(ゆうぎ)につかれてきて、夕まぐれの青やかな空気のなごやかさに私たちの心も何がなしとけこんでゆくころにそれをした。それをする相手も、たれであってもかまわぬというのではなかった。第一そんな遊びを頭からこのまないなかまもあった。女の子はたいていすきだった。

　ふたりいればできると私はいったが、ひとりでもできないことはなかった。私はひとりでよくした。ただひとりのときは自分がふたりになってするだけのことである。つまり花をとってかくしておき、そこからすこしはなれたところへできうべくんば家の角を一つま

わったところまで、いっておにになり、眼（め）をとじて百か二百かぞえ、それからさがしに出かけるのである。
だがそれをひとりでするときは心に流れるうらわびしさが、硝子（がらす）の指先にふれる冷たさや、土のしめっぽい香（かおり）や、美しい花の色にまでしみて余計（よけい）さびしくなるのだった。
ふたりか三人でその遊びをしたあと、家へ帰る前に美しい作品を一つ土中にうめておきそのまま帰ることもあった。その夜はときどきうめてきた花のことを思い出し床（とこ）の中でも思い出してねむるのである。
そんなとき土中のその小さな花のかたまりは私の心

の中のたのしい秘密（ひみつ）であって、母にもたれにも話さない。つぎの朝いってさがしあててみると、花は土のしめりですこしもしおれずしかし明るい朝の光の中ではやや色あせてみえ私はそれと知らず幻滅（げんめつ）を覚えたのであった。また前の晩（ばん）にうめておいた花のことをつぎの朝、子ども心の気まぐれにわすれてしまうこともあった。そういう花が私たちにわすられたままたくさん土にくちてまじったことだろう。

　私たちは家に帰る前に、また、そのとき使った花や葉を全部あつめほんとうに土の中に土をもってうめ、上を足でふんでおくこともあった。遊びのはてにする

この精算は私の心に美しいもの 純潔（じゅんけつ）なものをもたらした。子どもでありながらなんといじらしいことをしたものだろう。

ある日の日暮（ひぐれ）どき私たちはこの遊びをしていた。私に豆腐屋（とうふや）の林太郎（りんたろう）に織布（しょくふ）工場のツル——の三人だった。私たちは三人同い年だった。秋葉（あきば）さんの常夜燈（じょうやとう）の下でしていた。

ツルは女だからさすがに花をうまくあしらい美しいパノラマをつくる、また彼女（かのじょ）はそれをつくり私たちにみせるのがすきだった。ではじめのうち林太郎（りんたろう）と私のふたりがおにでツルのかくした花をさがしてばかりい

た。

私はツルのつくった花の世界のすばらしさにおどろかされた。彼女は花びらを一つずつ用い草の葉や、草の実をたくみに点景（てんけい）した。ときには帯（おび）のあいだにはさんでいる小さい巾着（きんちゃく）から、砂粒（すなつぶ）ほどの南京玉（なんきんだま）を出しそれを花びらのあいだに配（はい）した。まるで花園に星のふったように。そしてまた私はツルがすきだった。

遊びにはおのずから遊びの終わるときがくるものだが、最後にツルと林太郎とふたりで花をかくし私がひとりおにになった。「よし」といわれて私はさがしにいったが、いくらさがしてもみあたらない。「もっと

向こうよ、もっと向こうよ」とツルがいうままにそのあたりをなでまわるがどうしてもみあたらない。林太郎(りんたろう)はにやにや笑(わら)って常夜燈(じょうやとう)にもたれてみている。林太郎はただツルの花をうずめるのをみていただけに相違(そうい)ない。「お茶わかしたよ」ととうとう私はかぶとをぬいだ。すれば、ツルの方で意外のところから花のありかを指摘(してき)してみせるのが当然なのだがツルはそうしなかった。「そいじゃ明日(あした)さがしな」といった。

　私は残念でたまらなかったのでまた地びたをはいまわったがついにみつからなかった。でその日は家に帰った。たびたび常夜燈(じょうやとう)の下の広くもない地びたを眼(め)

にうかべた。そのどこかに、ツルがつくったところのこの世のものならぬ美しさをひめた花のパノラマがあることを思った。その花や南京玉の有様が手にとるように閉じた眼にみえた。

朝起きるとすぐ私は常夜燈の下へいってみた。そしてひとりでツルのかくした花をさがした。息をはずませながら。まるで金でもさがすように。だがついにみつからなかった。

それから以後たびたび思い出してはそこへいってさがした。花はもうしおれはてているだろうということはすこしも考えなかった。いつでも眼を閉じさえすれ

ば、ツルのかくした花や南京玉が、水のしたたる美しさでうす明かりの中にうかぶのであった。たれか他の者にみつけ出されると困るので、私はひとりのときにかぎってそこへさがしにいった。

遊び相手がなくてひとりさびしくいるとき、常夜燈の下にツルのかくしたその花があるという思いは私を元気づけた。そこへかけつけ、さがしまわるあいだの希望は何にもかえがたかった。いくらさがしてもみつからない焦燥もさることながら。

ところがある日、私は林太郎にみられてしまった。私が例のように常夜燈の下をすみからすみまでさがし

まわっていると、いつのまにきたのか林太郎が常夜燈（じょうやとう）の石段（いしだん）にもたれてとうもろこしをたべていた。私は林太郎にみられたと気づいた瞬間（しゅんかん）ぬすみの現行（げんこう）をおさえられたようにびくっとした。私はとっさのあいだにごまかそうとした。

だが、林太郎（りんたろう）は私の心の底までつまり私がツルをすいているということまでみとおしたようににやにやと笑（わら）って「まださがいとるのけ、ばかだな」といった。

「あれ嘘（うそ）だっただよ、ツルあ何も埋（い）けやせんだっただ」

私は、ああそうだったのかと思った。心についていたものがのぞかれたように感じて、ほっとした。

それからのち、常夜燈の下は私にはなんの魅力もないものになってしまった。ときどきそこで遊んでいて、ここには何もかくされてはないのだと思うとしらじらしい気持ちになり、美しい花がかくされているのだと思いこんでいた以前のことをなつかしく思うのであった。

林太郎が私に真実を語らなかったら、私にはいつまでも常夜燈の下のかくされた花の思いは楽しいものであったかどうか、それはわからない。

ツルとはその後、同じ村にいながら長いあいだ交渉をたっていたが、私が中学を出たときおりがあっ

て手紙のやりとりをし、あいびきもした。しかし彼女（かのじょ）はそれまで私が心の中で育てていたツルとはたいそうちがっていて、普通（ふつう）のおろかな虚栄心（きょえいしん）の強い女であることがわかり、ひどい幻滅（げんめつ）を味わったのは、ツルがかくしたようにみせかけたあの花についての事情（じじょう）と何か似（に）ていてあわれである。

底本：「花をうめる　新美南吉童話作品集5」てのり文庫、大日本図書
1989（平成1）年4月26日第1刷発行
底本の親本：「校定　新美南吉全集」大日本図書
初出：「哈爾賓日日新聞」
1939（昭和14）年
入力：鈴木厚司
校正：佳代子
2004年2月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。